

❖ 国際総合馬術のフォーマットとスターレベル

7月上旬にはインターナショナル競技デビュー、Vikenti では渡英して初めて XC (クロスカントリー) でタイムイン (規定タイム内でゴール) することができましたが、Tacoma はクロスカントリーで3反抗失権という結果でした。7月末のアイルランドで行われたインターナショナル競技では初めて CCI-L 競技 (3Day で行われる公式フォーマット) に出場し、3日間全ての種目を無事に完走することができ、大きな経験になりました。

コンスタントに競技経験を積み、トレーニングを続けていることで馬との関係性は良くなっています。また、自分自身の姿勢や癖を直すために多くの時間を費やしました。小枝をはさんで脇が開かないようにする、肘を曲げて拳はややねかせてその姿勢を鏡でチェックする、後ろから撮影してもらって体の歪みを確認するなどです。基本的な事柄が多く、トレーニングの進捗としては後退しているのではないかと感じることもあります。今、この癖を直さなければこの先のレベルアップはなく、これが直れば全てがうまく回り出すことを信じて、長い年月をかけて体に染みついてしまった悪い癖を一つずつ矯正しています。

2022年現在、国際総合馬術競技は CCI-L (ロングフォーマット) と CCI-S (ショートフォーマット) の2つのカテゴリーがあります。CCI-L は3日間かけて馬場→XC→障害の順に行われ、クロスカントリー競技の距離が長くスタミナが必要なものの、CCI-S は障害が XC より先に行われる場合もあり、XC の距離も短いことが特徴です。2016年当時、CCI-L は CCI、CCI-S は CIC と呼ばれていましたが、2019年から現在のカテゴリーとなっています。

また、スターレベルについても2019年に FEI ルールの改定があり、それまでは1* から4* まででしたが、これまでの1* が2*、これまでの2* が3* というように、スターの数字が1つ上がり、最高難度のレベルは4* から5* と表記するようになりました。

このコラムでは、CCI-L、CCI-S という現在のカテゴリーおよびスターレベルに基づいて表記していきます。

❖ 各馬のトレーニングと競技会出場

Brookpark Vikenti

2016年当時8歳 セン アイリッシュスポーツホース

繊細な Vikenti はリラックスして競技に臨めるかが課題ですが、初の3Day の CCI2*-L 競技 (当時の CCI 1*/Camphire International Horse Trials) では、早めに入厩したこともあり、会場の雰囲気にも慣れて落ち着いた状態で初日を迎えることができました。ただ、演技終盤に急に風が強くなり、燕尾服の裾が馬体に当たるのを Vikenti が気にして、後肢の手前が変わるなどのミスが出てしまいました。もともと敏感な馬なので、燕尾服が当たるのを気にすることは想定しており、数日前から燕尾服を着てトレーニングを行なって慣れさせていたのですが、

風とともに強く当たったことで馬が驚いてしまいました。

クロスカントリーは、これまで出場した競技会とは違い距離が長く、難しいコンビネーションが多く設置され、さらには障害間の距離が長い「走る」「コントロールする」という、コースデザイナーからの要求が明確であることなど、CCI-L 競技ならではの難しさが多く見られました。前回 (8月号) 触れたように、1つのコンビネーション障害に対して複数のラインが存在するので、馬によって、あるいはAの入り方次第でBへのアプローチや歩数を変えなければならないこともあり、瞬時の判断が要求されました。ただ、コースの全長が長くタイムを稼げる箇所がいくつもあって CCI-S と比べてタイムインしやすいこともあり、余裕をもってゴールすることができました。

これまでは1Day あるいは2Day で行われる競技に出場してきたため、クロスカントリーを走った翌日に障害馬術という流れは初めてでした。準備運動の段階から馬の状態を把握することに専念し、前日の XC で疲労している筋肉をほぐすことから始めました。競技本番でも Vikenti の状態は良く、問題なく減点0で3日間を完走することができました。

初めての雨の中出場した競技では、馬場馬術競技で緊張して運動にならなかったこともあり、乗り方や使っている道具は何一つ変えていないので、雨が耳や体に当たることで神経質になってしまったようです。雨が当たると緊張してしまう程繊細だとは思っていませんでしたので、今後は雨の日の競技は運動の組み立て方を工夫する、イヤernetをつけるなどの対応が必要ですが、緊張の原因が雨であることが分かったことは今後に繋がることなので前向きに捉えるようにしています。

同じ1Day 競技会のクロスカントリーで Vikenti が初めての拒止をしました。大きなテーブル障害から5歩でコーナー障害というコンビネーションでしたが、完全にライダーのミスでした。1つ目のミスは、A のテーブル障害で踏み切りがやや遠くなってしまい、馬が大きく飛越したことです。私のプランではしっかりとコントロールされた駈歩で近い踏み切りから飛越させ、着地と同時に B のコーナー障害に向かうつもりだったのですが、A を大きく飛ばれたことで理想のラインから外れてしまいました。2つ目のミスは着地後に素早くコントロールできたことで「これならいける」と思い、情性で B に向かってしまったことです。A でプランから外れても、B に向かって油断せず確実にアプローチしていれば十分にリカバーできた拒止でした。

シーズン後半となる9月に出場した1Day 競技のインターメディアイトクラス (ナショナルの3* クラス) では、Vikenti と共に馬場馬術で過去最高の76%をとることができました。感覚・内容・結果が一致していたことが私にとって重要で、とても嬉しい結果となりました。その一方で、クロスカントリーの難易度はさらに上がり、下りの障害で「意図的に手綱を伸ばす」

技術の必要性が増してきました。私の感覚では手綱を伸ばして
いるつもりなのですが、実際には伸ばし足りておらず着地で馬
に連れ去られてしまい、人間のバランスをキープすることがで
きないため、着地後の動作が遅れることが何回もありました。
この先のクラスではドロップ（下り）からのコンビネーションは
当たり前のように設けられるので、何とかこの技術を習得し、
レベルアップしていかなければならないと感じています。

9月末の CCI3*-S（当時の CIC2*）がシーズン最後の競技
会でした。来シーズンへ向けての足がかりとなる重要なインター
ナショナル競技会だったのですが、クロスカントリーで人馬転倒
して失権という最悪の結果になってしまいました。

転倒したのはコース終盤の水濠に設けられたコンビネーション
でした。A の生垣から5歩で B、B から4歩で幅の狭い C とい
うトリプルでしたが、C に対する踏み切りが曖昧になり、3.5歩
で飛びつこうとするも飛越が中途半端になって障害物の上に乗
り上げるようにバランスを崩し、馬ごと前転してしまいました。
いろいろな要因が重なっているのですが、直接的なミスは私が
B から C に向かって「コントロールして4歩」という選択をした
ことにあると思っています。私が4歩を選択しているにも関わら
ず、馬が3歩で踏み切ったということは、4歩
よりも3歩が正解だった（馬にとって簡単だった）
ということ。次に、コース後半でコントロール
性が悪くなってきている状態の馬をコンビネ
ーションの間でコントロールするよりも、コンビ
ネーションの間は馬に同調してリズムを乱さな
いよう流れに乗っていき、コンビネーション通
過後にコントロールし直す必要があったとい
うこと。すなわち、コンビネーション間では“コ
ントロールしきれていない状況にあったとし
ても、通過することを優先すべき”だったのです。

落馬したコンビネーションの次に急な坂を下
り、また上り直した先にコンビネーションがあ
ったので、私はどうしてもここでコントロール
しておく必要があると考え、たとえこの障害を3
歩で押し切ってクリアしたとしても次で失敗す
るのではないかという判断から4歩を選択しま
した。この「コントロールしきれていない状況
であったとしても」という状況は、クロスカン
トリー特有の感覚と技術だと感じています。障
害馬術や馬場馬術では、コントロールできてい
なくても押し切ることが正解ということとはほ
ぼありません。当然のことながら100%馬をコ
ントロールできている状態が理想です。もちろ
んクロスカントリーでも100%コントロールでき
ていることが理想なのですが、状況によっては
コントロールしきれていなくても流れに乗っ
ていく方が正解になることがある。ということだ

と認識しています。

シーズンオフには二蹄跡運動のトレーニングを強制的に行い
ました。

今は角度の浅い肩内と腰内がバランスを崩さず確実にに行える
ようにしている段階で、ハーフパスに関してもベンドの浅いハー
フパスに止め、バランスやリズムが崩れないことを重視してト
レーニングを行なっています。肩内では蹄跡から5m ほど離れ
た位置で行い、壁やラチに頼らず馬自身にアップヒルのバラン
スを保たせること。腰内とハーフパスでは図のように、両肩の
ラインと進行方向が垂直になることを意識するように指導され
ています。図はあくまでも私のイメージであり極端な表現になっ
ていますが、ベンドがキープできない馬に対してハーフパスのト
レーニングを行う準備段階という位置づけです。

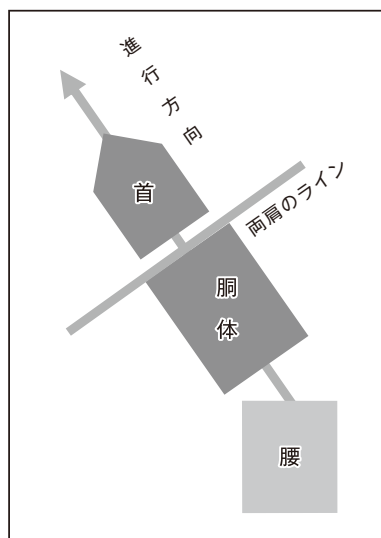
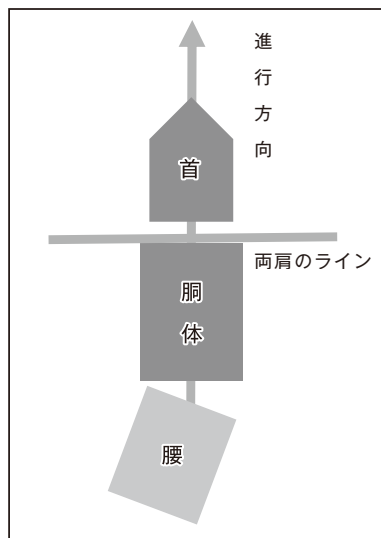
このトレーニング方法は、これまでも日本で私が騎乗してい
た障害馬にも取り入れてきたトレーニング方法であり、特別新し
いものではありませんが、特に両肩のラインを強く意識すること
によって、馬がどのようにバランスを崩しているのかを明確にす
ることができます。

ハーフパスも同様に進行方向と両肩のラインを強く意識して
斜線上で腰内を行い、アップヒルのバランスを
キープさせます。競技会で求められているハー
フパスとしてはベンドが不足しているため高得
点につながるハーフパスではありませんが、あ
くまで準備段階としてこのようなトレーニングを
繰り返し行い、より良いハーフパスを行うた
めに必要な筋力をつけているといった状況です。

Tacoma D'hoset 2016年当時9歳 牝 セルフランセ

初の3Day 競技は、Tacoma での3Day な
らではの失敗があり、馬場馬術でこれまでに最
も悪い得点率となりました。Tacoma はもとも
と落ち着いた性格で、これまでの1Day 競技
では入厩から競技までの時間が短いため、程
良い緊張感の中で競技に臨むことができていま
した。しかし、今回は3Day で月曜日に会場
入りしたことにより、馬が会場の雰囲気慣れ
過ぎて、悪い意味で緊張感のない演技になっ
てしまったのです。

クロスカントリーは Vikenti より先に走行しま
した。通常、クロスカントリーの下見では1分
ごとの到達地点を確認します。スタートしてか
ら1分でこの場所を通過、2分でこの場所を通
過……というポイント（場所）を見極め、それ
によって自分の走行スピードと残りのタイムを
把握しながら走行します。これを「ミニッツポ
イント」と言います。今回は感覚をつかむため



に、あえてミニッツポイントを計らずに走りました。そのため前半に飛ばし過ぎてしまい、それに気付いた後半は馬なりにしたのですが、規定タイムより30秒以上早くゴールする結果になってしまいました。このクラスでは余力を残していましたが、今後クラスアップしていけば最後まで体力が持たないことになってしまうので、スピード感覚やペース配分は私自身が体得していかなければならない技術だと感じました。

先に走行した Vikenti が拒止をしてしまった1Day 競技では、その失敗を Tacoma で取り戻すべく細心の注意を払って走行し無事クリアすることができました。感触として2頭の違いは「コンビネーションの中でさらに強く乗っていった」というところでした。Tacoma ではAのテーブル障害の着地後すぐにコントロールし、そこからさらに推進して強い駆歩を作りだすようにしました。コンビネーションではあるものの流れだけ（リズムだけ）でアプローチするのではなく、B障害も単独の障害物としてパワーを足してアプローチするという感覚でした。トレーナーの土屋毅明氏からは「馬を信用して走行しなければならないが、いつ躊躇されても対処できるだけの準備はしておくように」と日頃からアドバイスを受けています。これからは100%馬を信用したうえで、さらに必要に応じて強く乗る技術を身につけていきたいと思います。

❖ まとめ

総合馬術に転向した最初のシーズンが終わりました。

シーズンの最後にきて初めての落馬失権、そして Tacoma が厩舎内で大怪我をしてしまうなど、悔やまれる事が続き落ち込んだまま最初のシーズンが終わってしまったように感じています。しかしながらこの1年間で学んだこと全ては、私にとってとても価値のあることばかりであり、障害や総合といった種目に関わらず一人の馬術選手として大きな財産になってくることは間違いありません。

これは騎乗の際に必要な技術だけの話ではなく、精神的な面においても感じており、馬術の本場ヨーロッパでシーズンを通して競技会に出場したことで学んだものは多く、日本では経験することができなかったものとなりました。

また、「今の私が世界的に見てどれほどの選手なのか」ということを明確に知ることができました。毎週のように競技会に出場してはオリンピックでメダルを取るような選手と戦い、その技術を目の当たりにし、私とその選手との間にどれほどの差があるのかを肌で感じることで、現在の私の実力を嫌でも知られることばかりでした。総合馬術という種目柄、馬場・クロスカンントリー・障害とそれぞれで差がある場合、たとえ1種目の差は小さくても、3種目の合計ともなれば大きな差となって結果に表れます。当たり前のことですが3種目の合計点数が最終的な結果なので、今の私では結果にも大きな差があることになります。また、イギリスは総合馬術が人気の国というだけあって、世界的には有名ではない選手ですら今の私からすればとても上手な

選手ばかりで、総合馬術初心者とも言える私が同じ競技会で戦えば、今の私の実力を知るには十分過ぎる結果でした。この「己の実力を知る」ということこそが私の1年目の収穫であったように感じています。

❖ 番外編

私が住んでいるところから車で15分ほどの距離にある、《Burghley House》という会場で、世界屈指の総合馬術の大会である《Burghley Horse Trials》が行われた。5月に開催される《Badminton Horse Trials》と並ぶ2大5*大会で、オリンピックや世界選手権以上に難しいとも言われているハイレベルなXCコースとして知られている。実際にコースを歩いてみたのだが、「本当に馬が飛び越えられる障害なのだろうか？」と思える障害がいくつか存在したので、その中からベスト3を紹介したい。

とは言え写真ではそのスケールが伝わらな過ぎて、非常に残念である。

第3位 テーブル障害

私はそれほど大きな体ではないが、それにしてもこのテーブルの大きさが伝わるのではないだろうか？ 驚くべきは、これが第3障害という「序盤の序盤」にある障害物ということ。



第2位 乾壕障害

この大会の名物障害とも言える障害物で、踏み切る地点から着地地点までは4m以上の幅がある。

私が立っている場所は乾壕の中なので、さすがに私が立っている場所から飛越するわけではないが、それにしても恐ろしい。



第1位 バンケット障害

写真を撮っている場所から、1完歩で私が立っている場所まで飛び下りることになる障害物。写真の上部に写っている2人がとても遠く小さく見えることを考えても、その落差が伝わるだろう……いや!伝わらない!!

私が感じた恐怖感は、この写真では伝わらな過ぎて!!

